

## 父の被曝体験地 長崎を訪ねて

---

マシオン恵美香  
釧路市

「封じられた夏」

あの日  
長崎市街を見下ろす丘の中腹に父は立っていた  
三歳年下の弟の手を携えて

あるいは  
アケビの蔓でもみつけれられるかもしれないと  
荒れた夏の林の中を歩いて

突然に  
ピンク色の閃光が大きな雲と共に空の中で光って  
天まで届いた灰が空を翳らせた

これまでに  
見たことも無い奇妙な形の雲ゆえに  
未知の恐怖を募らせて

ふいに  
弟の汗ばんだ垢まみれの手を引き寄せ  
引きずるように丘を走った

見る間に  
真っ黒で不穏な雲が追いついて

バラバラと大きな粒の雨を降らせた

あの日

まだ九歳だった父の夏の思い出は

雨に濡れたことで閉じられた

(2009年5月発刊『釧路春秋』第62号、73頁)

## 父の生い立ち

上記は郷土の文芸誌『釧路春秋』に掲載された私の拙い詩です。父が雨による直接被曝を体験した記憶を語ったときの表現を用いて記しました。私の幼年期から父が亡くなる直前まで、父本人の口から何度となく繰り返し聞かされた戦争体験、とりわけ長崎での疎開生活に関する思い出話に拠ります。

父は56歳で最初の癌を発症しましたが、それより10年くらい前から胃部の不調を訴え続け、常に市販の胃腸薬を服用していました。その後は幾つかの部位に別な癌を同時に発症し、手術、転移、再発、そして、最後は白血病で2001（平成13）年11月15日に亡くなりました。70歳になったばかりでした。

実は、父が亡くなって7年後に私自身も胃部の悪性進行癌を医師に告げられ、私は父と同じ病を得て、「父の人生を知りたい」と思い始めました。

父の兄弟は彼自身を入れて13人、祖母は疎開前に肺結核で亡くなったそうです。祖父はどういう訳なのか、うんと若い志願兵が海を渡るような時期になってさえ赤紙を受け取ることも定職に就くこともなく、丁稚に出した子どもの半年先の給金さえ奉公先に前借りするような「博打打ちだった」と、父が批判的に言うことがありました。終戦が近くなって、年長の兄弟は戦争へ行き、口減らしのため、女の姉妹や年少の兄弟は、数名づつに分けられて親類縁者に預けられたそうです。

私が育ったのは札幌市でしたので、父が懐かしく口にする九州各地の街の名前に耳馴染みがなく、あまりよく思い出せません。それでも、一番良い思い出があったのは天草だったことや、後に被曝体験をすることになった長崎市内が疎開先であったことなどは、かろうじて覚えていま

した。

私が幼いころ、毎晩の夕飯の度に聞かされる怖い話が嫌でした。そのため、夕食時になって普通の家庭の家族の団欒を味わうことがあったかも、あまり記憶にありません。父と共にする食卓はいつも居心地が悪く、恐怖ですらありました。戦時中は毎日とてもひもじくて、道に落ちていた古ベルトをガムのように噛んだことさえあったこと、被災後の長崎周辺は被曝した人々が恐ろしい姿で列を成し、川に水を飲みに来たものこと切れて、屍が山のように折り重なっていたなどという話を、食事時の度に聞かされるために、私も弟も食欲が減退し、夜は悪夢を見ました。

しかし、私は父の疎開や被曝の体験を正確に聴き取ってはいませんでした。父のアルコール依存が家族を常に震撼させてもいました。父自身のコンプレックスもあったのか、家族や周囲の人たちとの間に不和を生んでもおりました。こうした理由があったため、私は父には共感できず、悲惨な戦争体験を集中して興味深く聴くことが出来なかったのです。病床の父に私は何度も父の過去を振り返るための聴き書きを試みようとしたのですが、それもできませんでした。それが後に「父の昔話の虚実を整理すること」が難しくなってしまった理由でもあります。戦争は殺したり殺されたりだけではない悲惨な体験を、次世代に引き継ぐものだと思います。

昨年末、戸籍謄本の記載を見ながら年号順に父の話を並べてみたところ、父が終戦当時9歳というのは誤りで、あと数か月で14歳を目前にした13歳であったことが判りました。転居を頻繁に繰り返し、小学校もろくに通えなかったとは聞いたことがありますから、同学年の子どもの年齢をそのまま記憶していた、あるいは年下の弟の年齢を言っていたのかもしれない。いずれにせよ、半世紀もの時を経たこの発見に驚かされました。私たち家族は父の生い立ちの基本のところさえあまり知らなかったのです。

## 長崎を訪ねて

昨年（2015年）6月、脱原発市民運動の仲間と共に、川内原発の再稼働阻止のための抗議行動に参加するため、福岡市へ行くことになりま

した。戦後70年の節目でもあり、年長の友人である小林善樹氏が同行して下さるといふ申し出と提案を素直に受け、帰路には長崎市に立ち寄って、父の足跡を手繰ってみることにしたのです。

長崎市ではまず、前もって連絡を取り合っていた「原爆被災者協議会事務所」を訪ね、事務局長の柿田さん、お母さんの体験を詳しくお話して下さった事務局の堀さんという共に被爆二世の女性に今回の旅の目的や父の被曝体験について話しました。ここでは、平



成26年版『原爆被爆者対策事業概要』という分厚い資料を拝受しました。資料はカテゴリーごとに原爆による被害を受けた方々の記録がまとめられていましたが、熱線、爆風、火災、熱波、音波、放射線による被害のことが主で、父のように雨に遭った記録についての分類はありませんでした。原爆資料館の展示物も同様でした。

原爆資料館では被爆継承課の葉山さんが、御自分の仕事の手を止めて、雨に関する記述も参考に、父が被曝体験をした場所を推察し、市内地図を広げて下さいました。

放射能の拡散レベルや範囲、熱風や音波の体験記録も追跡調査は難しかったようで、父のような体験をした被災者の手記を『長崎原爆戦災誌』の中にたった1つだけ見つけることができたものの、私には地名に覚えが無いので、父があの日居た場所を特定するまでには至りませんでした。

父は山頂で初めて、呆気にとられるほど大きなきのこ雲が、ものすごいスピードで迫ってきたことに気付いたと言っていました。山中、あるいは谷に居たために、熱線などを受けずに済んだのでしょうか、父が弟の手を取って走って下山している最中に雨が降ったことなどからは、爆心地からの距離までは推量できません。被曝当日の風向きがどうだった

にせよ、どうやらキノコ雲は西北方向に勢いよく流れたようです。もちろん波紋のように広がったわけですが、長崎が南北に長いことに対し、山の位置、遮蔽物の無い対岸など、被爆者の家でうかがった情報を照らすと、南東の堀さん（被爆二世の女性）のお母さんの実家あたりとは正反対だった位置と思われることが解ってきました。すると、山、丘陵地などを地図から推測することができます。

父たちは終戦間近かの疎開先が長崎市内またはその周辺を転々としていたこと、見えた景色から推察しても、滞在先が父の戸籍に記される田川郡糸田町1529番地ではないことは確かですが、この住所も爆心地からおよそ40kmほどの換算になるかと思えますし、木原町方面から外側だった可能性も捨てきれません。父の体験を裏付ける資料を探す中で、被爆者の方々の「同心円12kmしか被爆者と認めなかった行政側への批判」も読み取ることになりました。

長崎市は戦後、何度も合併などを繰り返して現在のようになっているため、父が居たころは小さな自治体でしたが、今は長崎市内となっている場所も自治体の名前を変えている、あるいは名前がなくなった住所もあるとの説明を受けました。『長崎原爆戦災誌』の中にあつた川平地区も今は地図にはみつけれられません。父を含む数名の証言によると、転居先では長崎から来たことを話すことははばかれたようです。「長崎から余所へ転居した人々が次々に奇病で亡くなっていく」とか、「病気がうつる」という噂によって職を得られない、地域での差別などが懸念されたからのものでした。

原爆資料館に展示されていた長崎型原爆ファットマンのレプリカは、側面に回ると内部構造を観ることができ、「周りの火薬でプルトニウムを内側に爆縮して核分裂を起こすシステムで、ヒロシマのとは違った構造」であると解説されていました。目を覆いたくなる様な痛々しい写真や被ばくされた山口さんという方の



ケロイドを型どったものもありました。熱波、音波、放射線の影響範囲などを記す地図があったのですが、どれも「直後に雨が降った」とされる程度で、「その雨に当たった人々の追跡調査に至る記録」はありませんでした。

2012（平成24）年1月15日、横浜で開催された脱原発世界会議に参加した際の分科会で、広島出身の被爆者で理論物理学者の沢田正二先生にお目にかかりました。このとき、「自分たちのようにまだ生きている被爆者でも、その当時は幼すぎたため語れるほどの記憶がない人もいる。多くの被爆者は病気や加齢のため亡くなってしまったため、これからは二世が重要な役割を持つ」と言われたことを思い出しました。沢田先生は「フォールアウトの範囲」について、「長崎は細長く38kmほど雲が流れた。長崎周辺で癌など晩発性の疾病を持った人の総数は、予測よりもっと多い可能性がある」とも仰っていました。放射能の影響が次世代へ引き継がれていくことを暗示しているとも思います。

脱原子力、戦争の無い未来を次世代に継承するため、私も二世として課せられた役割を少しでも果たせるよう努力したいと考えています。

